

## 第25回佐賀県総合教育会議（R5.03.24）

### 1 開会

#### ○前田政策総括監

それでは、ただいまから第25回佐賀県総合教育会議を始めさせていただきます。

私は、本日進行を務めさせていただきます政策部政策総括監の前田でございます。本日もよろしくお願いいたします。

それでは、開会に当たりまして、山口知事から御挨拶を申し上げます。

### 2 あいさつ

#### ○山口知事

今日は次期教育大綱についてと、県立大学についてというのが議題になっております。教育大綱も非常に重要な問題でありますので、骨太な議論をさせていただけたらいいなと思っております。

県立大学については、これから大きな方針ということでまた議論が進んでいくと思えますけれども、発案者の我々といしましては、特に新しい大学をこれからつくるということであれば、今ある小・中・高と連携したようなもの、私は去年、フィンランドを訪れたときに、アールト大学だっただと思えますけれども、小学生や中学生が普通に大学の中で授業を受けたりすると。自分たちでバスに乗ってくるのが自然な姿だと言われて、えっと思ひまして、そうやってふだんからその先の学びということと連携しているというのはすばらしいことだなというふうに思いましたので、こういったところについても、ぜひ教育委員会の皆さんと議論ができたらなと思えますし、その後、高校を卒業して実践的な教育をするという部分についても、県立大学においても同じように今ある県内企業といったところとも連携できるように、そういうようなITプラス経営力というふうにしていますけれども、そういう実践力がつくような子供たち、骨太な子供たちが育っていけるようなということと、これは毎度申し上げますけれども、佐賀県の8割以上の皆さん方が佐賀県の大学の定員が少ないということもあって、県外に進学せざるを得ない子供たちもたくさんおられます、まさに佐賀県の教育界が手塩にかけて育てた子供たちが、もちろん望んで県外に行かれる方、これは応援していきべきだと思えますし、佐賀のことを大切に、いずれまた戻ってきたい、佐賀のことを意識しながら、気にかけていただきながらということもあるんでしょうけれども、佐賀でそのまま学びたいという方についてはしっかりと受皿をつくってあげたいなという気持ちもあってということではありますが、いずれにしても、これについては様々な、これからまた議論を踏まえながら進んでいこうかなというふ

うに思いますので、今日もいろんな議論をいただきたいと思います。よろしくお願ひします。

### 3 内容

#### (1) テーマについて説明

##### ○前田政策総括監

それでは、本日の議事に入らせていただきます。

今日のテーマは2つ、次期教育大綱と県立大学ということなんですけれども、まず1つ目のテーマであります次期教育大綱について、私のほうから教育大綱の骨子案の内容などについて説明をさせていただきます。

次をお願いします。

まず、この教育大綱の位置づけということなんですけれども、地方教育行政の組織及び運営に関する法律が平成27年に改正をされておきまして、地方公共団体の長が教育、学術、それから文化の振興に関する総合的な施策につきまして、その目標や施策の根本となる方針を定めることとされておきます。

これは、近年の教育行政におきましては福祉、それから、地域振興などの一般行政との連携が必要ということなどが考慮されたもので、この総合教育会議で協議、調整の上策定することになっておきます。

そして、この教育大綱の役割としましては、知事と教育委員会が基本的な認識を共有して、連携を密にしながら施策を推進するというものでございまして。

次をお願いします。

現行の大綱が令和元年度に策定をしておきまして、計画期間が本年度までとなっております。そして、今回策定します次期教育大綱につきましては、来年度から令和8年度までの4年間となります。これは現在策定をしておきます佐賀県施策方針、いわゆる県政全般にわたる総合計画がございましてけれども、こちらの計画期間に合わせておきます。

この次期大綱ですけれども、今回その骨子案を作成したところです。

この骨子案ですけれども、14の基本施策で構成しておきます。佐賀県施策方針との整合を図る観点から、施策方針に掲げるもののうち、教育、生涯学習、文化、スポーツ、子育て、雇用・労働の各分野の施策で構成をしておきます。

そのポイントとしましては、これまで取り組んでまいりました志を高める教育の推進でありますとか、佐賀の産業を支える人材の育成については、今後さらに推進をします。それから、「ほめるから、はじめる。はじまる」を推進するとありますけれども、これにつきましては、日頃から子供たちの考えや挑戦を最大限尊重し、認め、そして、積極的にほめて応援する姿勢で子供たちと向き合うという考えの下で、骨太でたくましい子供を育成

することを指すということになっております。

それから、実践的な人材の育成ということでは、高等教育機関の充実につきまして、新たに県立大学の調査、検討を進めることとしております。この県立大学につきましては、後ほど基本的な考え方を御説明した上で、別途意見交換をお願いしたいと思います。

今後のスケジュールですが、本日、骨子案について意見交換をしていただきまして、その結果を踏まえて、5月に開催予定の次回の会議で大綱の最終案をお示ししたいと考えております。

次をお願いします。

5ページからが大綱の骨子案ということになるんですけども、教育大綱に記載する内容につきましては、今御覧いただいている表の左半分にございます基本施策、取組方針などということになります。表の右側のほうに取組例と書いておりますけれども、こちらは取組方針に基づきどういった取組を行うのか、イメージしやすいように現在取り組んでいるものも含めて取組の具体例を記載しております。

先ほど御説明したとおり、全体では14の施策となっております。教育分野が5ページから、お手元の資料で7ページにかけてになりますけれども、高等教育機関の充実までの8施策、それから、8ページにかけて子育て、生涯学習、文化、スポーツの各施策となっております。

現行の大綱と比較をしますと、基本施策の部分では6ページいいでしょうか。6ページの教育DXの推進と学びを支える環境づくり、それから、8ページいいでしょうか。8ページのスポーツビジネスの推進については新たな打ち出しとなっております。

それから、取組方針のところでは、5ページのSAGA部活の推進、それから、7ページの県立大学（仮称）の調査・検討、こちらは現行の教育大綱にはない新たな取組ということになります。

今回の骨子案では、施策の柱立てと取組方針の項目のみを記載しておりますが、今後、先ほど申し上げました佐賀県施策方針の策定作業と並行しまして、この教育大綱の具体的な内容、具体的な文言について詰めていくこととしているところでございます。

私からの説明は以上でございます。

## （2）意見交換

### ○前田政策総括監

それでは、意見交換をお願いしたいと思います。

牟田委員、御意見を申し上げます。

○牟田委員

私じゃないんですけど、加藤委員が何か一言言いたいと。ぜひ加藤委員に。

○前田政策総括監

お願いいたします。

○加藤委員

佐賀県はいいキャッチコピーがいっぱいあると思います。

私がキャッチコピーで一番好きなのは「佐賀さいこう」なんです。

「佐賀さいこう」が何で好きかというと、すごく分かりやすいし、元気になるキャッチコピーだなと思います。星生も「星生さいこう」というのをしているんですよ。

それがやっぱり、子供たちにもすごくいいんですよ。分かりやすいし、「さいこう」のところはもっと何かというところを見いだせるのが一番好きです。

その次に好きなのが、4番目に「誰もが安心して学べる教育の推進」で、教育長が言われた「さがすたいる」です。

「さがすたいる」は何か感じるものがなんか優しいイメージがするので、それを入れていただけるといいなと思っています。

○山口知事

そうだね。だから、これって佐賀の大綱だから、佐賀らしい言葉とかを、誰もがなんて、別に長崎県だって福岡県だって一緒だと思う。素晴らしい言葉がどんどん入ってくるというのがよくないかな。

○落合教育長

教育委員会の重点プロジェクト名では、さがすたいるスクールプロジェクトと打ち出しているんですけど、大綱の中には書いていないので。

○進政策部長

そういうのは入れて。

○山口知事

そういうのはぜひできれば。だって、うちのものだもん。だから、うちの総合計画もさ、一般的な言葉はやめてさ、佐賀らしい言葉に大分変えたよね。

○前田政策総括監

大分変えていますけど、すみません、まだこういうのも残っていました。

○加藤委員

よろしく申し上げます。

○前田政策総括監

ありがとうございます。

○牟田委員

もうよろしいです。

○前田政策総括監

申し上げます。

○飯盛（清）委員

不登校、いじめの問題が佐賀でも深刻だと思います。それで、この教育大綱の中に入れるべきなのかどうなのかよく分からないで発言しますが、保護者も含めた、保護者の教育力というか、だから、学校の保護者対応力というのは、そこら辺りについて高めていく必要があるのではないかなという気がしています。

いろいろ不登校にしても、いじめにしても、保護者と学校側が同じスタンスに立てると回復していくというかな、復帰できる可能性が非常に高いと現場で見ている感じがします。ただ、争いになると子供がまたより深刻な状況になっていきますので、そこら辺りまで含めた、保護者には学校のやっていることを理解してもらって協力をしていく姿勢、それから、学校は子供相手の仕事ですので、保護者対応というのはそんなに得意じゃない先生方も多いので、そこら辺りのことをどこかに入れられないかなというか、そういうことを考えていく必要があるのではないかなと思っています。

社会教育になるんじゃないかと、社会教育も教育委員会の分野ではあると思うんですが、学校が呼ぶ力と、例えば、公民館で主催して保護者の方どうぞという力は全然やっぱり違います。義務感というかな、学校から呼ばれると保護者は行かにかいかなという気になるんだけど、公民館でそういった有効な講演会をやっても、この前、加藤委員に諸富に来てやっていただいたんですけども、やっぱり学校関係者がほとんどでした。そういったことが現実としてあります。

以上です。

○前田政策総括監

ありがとうございます。

荒木委員いかがでしょうか。

○荒木委員

私からは10番の生涯学習、ライフステージに応じたまなびの環境づくり。

今、リスキルとか、リカレント教育というのがすごく叫ばれるようになって、弘道館とか図書館とかでも大人の方も勉強するような機会が、その中に恐らく保護者の方も混じって自分の子供と一緒に勉強しようと思いつながら学んでいる方がいらっしゃると思うんです。

不登校とか、引きこもりの子供、逆に学校でもし居場所がなかった場合、こういうところに行けるというセーフティーネットにもなるのかなというふうに思っています。

ただ、今、飯盛先生が言われたように、学校とまだ結びつきが少し弱いかなと思っていて、やはり、あっているけど、チラシは配られるけど、行くというアクションにまだ踏み込めていない生徒さんって多いのかなと思っているのも、弘道館とか行ってみようというふうに思っていますし、もっとますます活性化していったらいいなと思っています。

○前田政策総括監

ありがとうございます。

飯盛委員いかがでしょうか。

○飯盛（裕）委員

私も「佐賀さいこう」が一番好きなんですけど、次に好きなのが「子育てし大県」、これもやっぱり佐賀らしい政策の名前の一つかなと思っていまして、本業の幼児教育じゃないですけど、これを見ていて、教育部門の4番と9番も物すごく密接に関係しているんじゃないかなと思いますし、今度、4月1日からこども家庭庁が新設されるので、やはりゼロ歳から大人になるまできちんと子育てし大県を佐賀は応援しますよというのを強く打ち出していくといいのかなと思います。

それで、小中連携は結構、教育委員会で見かけるんですけど、佐賀で幼保小連携、幼児教育と小学校の連携が4段階あるうちの、まだ2段階ぐらいがほとんどだという話を聞くので、そちらのほうも強くというか、文言に入れていただいて、連携を進めていただければなと思っているところです。

○前田政策総括監

ありがとうございます。

落合教育長いかがでしょうか。

#### ○落合教育長

ここにも書いてもらっていますけれども、「ほめるから、はじめる。はじまる」というのを一生懸命提唱していきたいなと思っていて、子供たちに肯定的に向き合うということと、主体性、子供たちがどう考えていくか、判断していくか、そこを大事にするようなことを教育関係者としてしっかり共有して取り組んでいく、その雰囲気を持ち上げたい、そこを中核に据えたいなと思っています。それは学校だけの問題じゃなくて、保護者とか、いろんな人たちが関わってくるものだと思うので、世の中に対して提唱していくというような感じでやっていきたい。

#### ○前田政策総括監

お願いします。

#### ○牟田委員

ここで言われていつも言っているように思うんですけど、大人になることを楽しみにしていけるような、そういう工夫ですかね、そういうふうにできればいいなと。鳥栖で悲惨な事件が起きましたけど、やっぱり今の子供たちって、僕らの子供だって50年ぐらい前に比べると、何か心を病んでいることが多くなっているような気がして、いつもそれは何でかなと思うんですけど、大人になっていくことが楽しいか分からないけど、社会が狭いところじゃなくて、社会から大人になる、それから仕事をする、子育てしていく、結婚するということが楽しいな、そういうことが楽しいんだろうなと思えるような教育にしたいですね。

#### ○山口知事

俺、最近、ここの1週間で中田英寿さんとか、岡田武史さんとトークショーとかしていて、改めて感じたことなんだけど、何というのかな、基礎的な力だったり、ルールだったり、こういったものがあって、ここって義務教育と言っていいのか分からんけれども、義務教育とか、親の教育だったりってあって、基本的な所作って、これは本当に教えなければいけないわけで、ある程度のところにいくと、それぞれが何というんだろうか、自由にエラーアンドトライというかさ、それぞれの考え方で、俺やってみたけど、やっぱりこっちやったかなとか、こんな感じで人って伸びていくと思っていて、自分もそうだったし、なんだけど、間違いを起こす人って、この枠はあっていいと思うんだけど、この枠が一体化する、親が自分でこうだよ、こうしなさいとか、学校の先生が、おいこうだろうって、

これを枠の中に入れようとする、自分なりの生き方だったりしてやって、伸びよう伸びよう人にするのに、枠の中に抑えようという部分、中田君はそんな箱は俺にはなかったから、好きなことをやっていたよって彼は言っていたけど、人は何なりと枠があるわけで、それをあんまり基礎的なところの人が枠で押さえ込もうとすると人って伸びていかないし、親が高校生になっても、大学生になっても、就職してまで言う人が今の社会であって、これは何とかならんのかなって、僕の問題意識なんですけれども、どうでしょうか。

だって、これはいろんな人、もちろん全ての人、もちろん障害を持っている人もそう、みんな人ってこうやりたくて、やりたくてたまらないわけです、ここから出ちゃいけないとかさ。これができたら大人は楽しい。これができる社会では大人は楽しいし、しかも、失敗していいんだし、そこを失敗しちゃいけないんだとやると、もう所作が決まりきっていて、つまらないよね、大人なんて。

#### ○落合教育長

保護者も先生も上のところまで枠にはめようという傾向が強過ぎた感がありますよね。子供の数が減ってきて、一人一人に対して。

#### ○山口知事

そう。そしたらさ、子供ってさ、親の枠は出れないから、結局、成長を阻害するというか、つまんない、自分以上の人間にはならないもんな。

#### ○飯盛（清）委員

圧倒的な力の部分で、全国学力・学習状況調査というのがあるって、佐賀が全国平均よりもなかなか上に行かないという、ただ、そのなかなか行かないのはほんのわずかな差だと思います。それをこの前、全国の会議に行ったときに、教育委員の方で北海道だったかな、自分は何年か新聞記者をしていましたと。やっぱりマイナスの情報を伝えると新聞は売れるんだと。だから、佐賀がもっと頑張れみたいな感じで書いてもらえるといいんだけど、今年もだめでしたとなると、学校としてもそれをプレッシャーに感じる部分もありますし、どうしてもそこに力を、もちろん大事なことはあるんですけども、何かそこから辺の情報に踊らされた部分もあるような気がします。

#### ○山口知事

そう。だから、それって言うなれば、ここの誤差でしかないと思うんですよ、先生が言うように。なのに、ここばかりやっていると、妙にここのことばかりを、このちょっとした点を上げることにばかりしゃかりきになっていて、実は人ってその後が大事



なのに。どう思う。

○進政策部長

結局、その上の部分ですよね。エラーアンドトライと書いていますけど、エラーすることが怖い。それで失敗するともう戻れないんじゃないかというふうに社会が勝手に思い込んで、だから、多分親とか学校でも子供に対して失敗しないようにこの枠に収まっておきなさいというふうな感があって、エラーしても大丈夫なんだというのを。

○牟田委員

根本的に佐賀県が発想を変えて、失敗してもいいことなんだということ。

○飯盛（清）委員

小学校でよく総合的な学習の時間で、物をつくって、スーパーとかで販売する、あるいは大きなショッピングセンターで販売するような学校があります。あれはほぼ間違いなく全部完売するんですよ。なぜかというと、保護者のおじいちゃん、おばあちゃんがみんな買いに来る。売れ残ったりしたらかわいそうだからエラーというのは起こさせない。それこそ失敗させて、どうして売れ残ったんだろうと考えるところがいっぱいあると思うんですけども、なかなか難しいですね、現状は。

○山口知事

どうやったらできるんだろうね。そういうのを自分でいって、いいんだよって、そこから頑張ろうって、次考えようという社会ができれば。

○落合教育長

大人も我慢しなきゃいけない部分があると思うんですよ。

○山口知事

もちろん我慢ですよ。これは我慢ですよ、その先のことは。答えを言うからいけない。多少は大人ってここからこの辺まで来ているから、見えているわけよ。一々言っちゃいけないと、子供たちがいろんなことを考えているからさ、自分なりにさ。

○落合教育長

サッカーのコーチ講習会で言われたんですよ、ナショナルトレセンコーチの。子供から

失敗する自由を奪うなど。

○山口知事

そうだよ。まさにそう。

○落合教育長

つい言い過ぎるわけですよ。

○山口知事

言うんだよ。そうすると、コーチにいっちゃうわけよ。そうするとコーチの枠を超えられないんだよ、選手は。ほんと。

○落合教育長

そうなんです。そこを我慢なんですよ、本当に、現場で指導していると。そこまで我慢して。

○山口知事

だから、いいコーチはやっぱり自分が我慢して、自主的に考えて成長するのを待つよね。そうしないと、結局人って育たないので、結局、親がこう言ったから失敗したじゃないかみたいなさ、人のせいにする。

○加藤委員

失敗したときそうなりますよね。

○山口知事

なるよね、だって、そのとおりしたらさ。だって、コーチがゆっくりやったらさって。

○進政策部長

そうなりますね。

○飯盛（裕）委員

でも、今回のWBC、優勝しましたけど、監督がね、一人一人がリーダーなんだと、そういう意識があったから、今回も勝てたんじゃないかなと思うしですね。

○山口知事

そうよね。そう。

○飯盛（裕）委員

私もやっちゃいけないって、我々は常に子供たちに接していますけど、何々しないといけない、やっちゃいけない、そう言うことそのものが子供の成長を阻害しているとよく言われるんですよね。自分で学ぶことを大人がやめさせているという。

○山口知事

そう。しかも、俺がなるほどと思ったのは、岡田監督が言っていたのが、これはみんな野球でもサッカーでも、みんなが仲良くするなんてあり得ないと言うわけです。違うんだから、ばらばらでみんながさ。ただ、みんなが勝つためとか、何かの目的のために一致団結することはあると。気持ちをそれぞれの役割に応じて、ある意味「さがすたいる」みたいなところがあるんだけど、だから、みんな同じ方向を向いて、左を向いてサッカーの試合しよう、野球の試合しようと言ってもうまくいかない。だから、今の話です。そういう雰囲気が出ていったら、佐賀の子は骨太に育っていくんじゃないかなと思うんですけど、どうでしょうか。そこがここの教育大綱にうまく反映、もしみんなが共感するんだったら反映できて、それが先生方とかいろんな保護者の皆さんに共有できたらすごくいい県ができるよね。まさに教育県として。

○落合教育長

そういうところをみんなで共有できるものにしたいですね。

○山口知事

そう。でも、なかなかそういう共有ができないと、何か失敗したじゃないか、それこそさっきの飯盛先生の話じゃないけど、点数が1点低いじゃないか、何か責任取れよとか、訳の分からん話になってさ、いいじゃないか、そのぐらいな。

○牟田委員

だけど、徐々に佐賀の教育も変わってきているんじゃないかと思うんですよね。こんな話は多分、10年、20年前はしていなかったんじゃないかと思うんですけどね。教育会議ができて、初めてこうやって教育も変えていこうじゃないかと。

○山口知事

教育委員が概ねなんとなく雰囲気、いいんじゃないっていう気がなかなかないもん。普通、何言っているんだ知事はとなるから。あんた、教育大綱をしっかりと作れよとかなるもんね。

○牟田委員

戻るけど、だから、佐賀は変わったよねと言われていいから、まず佐賀から変えていくというのが一番じゃないかと思います。5年後、10年後にはきっと変わっている。

○山口知事

多分、弘道館もそうだったんだろうと。既存のところから全てを導くなという教えだったしな。サッカーのコーチなんかはそれで少しずつ変わっていつているんですか、佐賀県のコーチは。

○落合教育長

佐賀県のコーチですか。やっぱりサッカーは結構そういうのがしっかりしていますよね、システムが。隅々のコーチに至るまで。プレーヤーズファーストをしっかりしようというところがですね。

○山口知事

だから、基礎的なところまではもちろん教えなければいけないし、これはきっちりやるべきだと思うけど、そこから後の話だよね。

○落合教育長

基礎を教えるときも、教えてやるのか、さも自分がやったかのような感じで身につけさせていくのかというのはうまさが違うんですね。

○山口知事

もっといいね、そしたらね。

○落合教育長

そういうところを目指したいなと思いますね。

○山口知事

そうよね。下の世界は、基礎的な世界もそういう雰囲気になったらもっといいけどね、確かにね。

○落合教育長

そういうトレーニングができていないと、上の世界に行ったときに、いきなり子供はそこで羽ばたけないと思うんですよ。

○山口知事

いい意見ですね。そのとおりです。

○牟田委員

まさにそういう人を県立大学で育てていくと。

○山口知事

そうそう。

○牟田委員

今日はいい流れだよ

○山口知事

そういうことなんだよ。それを大学ってそういう奔放な世界だから、もっともっと自由な、何をしゃべってもいい、学術的にはいい世界だから、そこが小学校の基礎教育のところからできていると、学問っていいんだと。しかも、決まりきっていないんだと。何をしゃべっても必ず正しいわけではないんだという世界に少し触れるだけで、何かがちがちで勉強させられて大人はつまんねえと思わないよ、そしたら。自由だもんね。

○前田政策総括監

ということで、県立大学のテーマに移ってよろしいでしょうか。

こちらについては、進政策部長のほうからまず御説明を差し上げます。よろしくお願ひします。

○進政策部長

まず、県立大学をめぐる現状とありますが、佐賀県における現状です。

左側ですけれども、大学進学者の約8割が県外に進学というふうに書いています。

まず、県内に大学が今何校あるかというのと、4年制大学はもう御存じのとおり2校だけです。真ん中ら辺に書いています。この2校だけというのは島根県と並んで全国最少です。要は2校しかないというのは、島根県と佐賀県しかないという状況です。

また、2校なんですけど、その中でも公立大学も高専も未設置の県となってくると佐賀県だけというふうになっています。ちなみに、上のほうに参考までに書いていますが、公立大学がないのは全国で4県だけです。また、高専がないというのは5県だけ、両方ともないというのが佐賀県だけというふうになっています。ですから、非常に高等教育機関が少ないというのが佐賀県の状況であります。

その一方で、じゃ、子供が少ないのかというのとそうでもない。左側ですが、15歳未満人口の割合は全国3位で、これはたまたま最近そうなのかというのとそうでもなくて、かれこれ25年間、数十年間にわたってずっと全国3位、人口が子供の割合が多いという状況が続いています。

ところが、さっき見たように大学が少ないということもあって、その下の少し色が変わっているところですが、大学進学時には当然行く先がない、佐賀県内には。8割は県外に進学してしまうという現状になっています。

やはり一度県外の大学に進学してしまうと、そのまま大多数が県外に就職してしまうという流れにずっとなってきたということなんです。

したがって、佐賀県の課題として、若者の大学進学時の県外流出が続いているということ、その結果というか、そういうこともあって、地域産業を担う中核人材が今足りない。非常に今佐賀県は人材不足になっています。そうしたことで、ここの課題に正面からぶつかっていく必要があるんじゃないかというのが現状でございます。

一方で、全国を見ますと、右側ですけれども、平成の30年間、平成の時代に公立大学というのは非常に急増しています。平成元年に39大学だったのが、令和4年、直近では99大学まで増えてきています。それも都市部にばかりできているのかというのと、その四角の中ですけれども、佐賀県より財政力指数が低い鳥取、島根、高知、この3つが低いグループですけれども、全てこの平成の間に県立大学を新設しています。

また、同程度の12県を見ても、そのうちの8県は県立大学を新設しています。新設していないところはどうかというのが、その下にあります青い囲みにありますけれども、4県あります。和歌山、鹿児島、徳島、佐賀ですが、そのうち、和歌山、鹿児島は、公立大学はつくっていないけれども、私立大学はこの間に増えています。徳島は増えていないんですが、もともと大学が4校ある。という中ですので、佐賀県は十分これは増やす必要性といいますか、状況を見ると増えていても全くおかしくない状況だということが見て取れます。

こうした中で、次のページですけれども、県立大学というのを議論してはどうかということで、2月3日に基本的な考え方というのを県として公表しています。時代の要請に応える実践的人材を育成していく必要があるのではないかとということで、想定する大学の形態、県立4年制大学、県が設置する公立大学法人で運営していくという形としてはどうかというものです。

実際に大学のイメージとしては、ITと経営をベースに学ぶ理文融合型の大学と。今のこの時代を踏まえますと、文系、理系とかははっきり分けるのではなくて、やはりそこは文系でも理系的な発想は必要ですし、理系の方も、今、社会の経営のほうにどんどん入っていていますので、そうした理文融合型、課題解決型の大学をつくっていったらどうか。

せっかくなつくということであれば、佐賀だからできる新しい大学の姿として、2つ書いていますが、企業、研究機関、教育機関など関係機関との連携による実践的課題解決型の学びを支援するような形としてはどうか。また、佐賀県では様々な施策をやっております。そうした特徴を生かしたデジタルの実証フィールドとか、スポーツとか、スタートアップなど、佐賀の施策を活用した学びをしてはどうかという形にしております。

具体的な場所はどうかということは、企業、研究機関、教育機関など関係機関との連携、これが佐賀だからできる新しい大学の姿というものをより発揮しやすい、そういう観点と、通学利便性等も考慮して決定したいとしています。

学校の規模ですけれども、入学定員に300人、これは実際の公立大学、全国の事例とか、もしくは佐賀県の現状などを踏まえて200~300人としてはどうかと。4年制大学ですので、そうすると、収容定員が1,000人前後というふうになることを提案しています。

開学時期は、これからすぐ準備を進めたとして、令和10年度の開学を目途として準備を進めてはどうか。先ほど見ていただきましたような現状がありますので、するのであればなるべく早くしたほうがいいのではないかとということで、スピード感を持ってやるとして令和10年度の開学を目途というふうにしています。

#### ○前田政策総括監

次をお願いします。

#### ○落合教育長

議論の参考のために、県内の高校からの進学状況というのを少し御紹介したいと思います。これは県立高校からの進学状況です。

円グラフを見ると、青系が県内、赤系が県外ということなんですけど、さっき知事からも、部長からもあったように、県内の国立、これは佐大しかないですけど、そこに12%、県内の私立、これは西九州大学しかないですけど、6%ということで、合わせて2割弱と。

○山口知事

県内の国立、県内の私立と特定できるのは1校ずつしかない。

○落合教育長

という状況で、8割以上は県外に行っているという状況です。

大学を選択する際、これは改めて整理のために下のほうを見ていただくと、どこに行けるかという学力の問題もあるんですけど、何を学びたいかという、そういう学部があったということと、あとは地域ですね、関東、関西、東京に行きたい、大阪に行きたいという人もいるでしょうけど、自宅から通いたい、地元に行きたいという子供もたくさんいると思います。

あと、負担の問題、学費の問題もありますけど、自宅から通うのと都会に行くのではかなり生活費も違いますので、どこまで負担できるかという家庭の事情というのも大きく影響してくるだろうと思います。

そういった中で、表ですけれども、見ていただくと、多くは隣県に行っていると。九州内ですね。福岡、長崎その他九州、中国ぐらまでのところはかなり。近畿とか関東に行っている人というのは、それなりに国立にしろ、私立にしろ、そこに行きたくて行っている人が多いんじゃないのかなと思うんですけど、近隣のところに、他県に行っている人たちというのは、その中の多くは近場で行きたいけど、なかなか県内にないという層が非常に多いのかなと思います。特に、真ん中の公立に福岡、長崎、その他九州、あるいは中国まで入れてもそこに結構行っていますけど、経済的な問題まで含めて、そこには県内にあれば行きたいという層はかなり含まれているでしょうし、九州内の私立とか国立に行っている層というのもそういうニーズが高いんじゃないのかなと、こういう状況になっています。

以上です。

○前田政策総括監

ありがとうございます。

それでは、意見交換をお願いしたいと思います。

○山口知事

ここに、県立大学ができれば数字が入ってくるのかな。

○進政策部長

そうです。



○山口知事

たださ、250とかが入るわけじゃないよね。

○進政策部長

現状はまだ。

○山口知事

長崎とか福岡に行っているかもしれないので、ここに入るのは多分100……

○進政策部長

半分ぐらい。

○山口知事

100ちょっとかな。

○落合教育長

それは定員が200、半分だとしても、結構インパクトは大きいですね。

○山口知事

あとはほかいろいろ、旭さんとかいろいろあるから、どうなっていくのかなというのもある。分かりました。ありがとうございます。

○前田政策総括監

荒木委員いかがでしょうか。

○荒木委員

本当に勉強できることの理文融合というのはすごく魅力的に思っています。

大学って専門性を学ぶところ、高校のときから文系、理系とか分かれてしまって、専門性を学びに大学に行くんだという常識が今あるんですけど、今、それがスティーブン教育とかをはじめとして、大きく変わってきているけど、なかなかそれに現場が追いついていないという現状をいつも考えておりました、私も大学生とかに文系だけん、数学分らないとか言っちゃいけないよとか、私なんかは、理系だけど、今は文系の仕事をしているよとか、そういうことをいつも話して、文理を分けているのはこのときだけなんだという話をしていきます。私も大学だと国立大学の専門性を学ぶことが非常に強いので、こういうよ

うな理文融合型が打ち出せるというのは非常に素晴らしいことだなというふうに思います。というのが1つ。

そしてもう一つは、今回、この話があったので、佐賀大学のことを調べてきております。佐賀大学は1学年の4分の1ぐらいが佐賀県出身です。だから、4分の3は佐賀県外から、主に福岡ですけれども、来ます。

私、佐賀出身ですよという人が佐賀で就職をするかというのを計算したら6割、60%の子が佐賀県に就職してくれています。福岡とか長崎から来たんだよという人も15%は佐賀に就職しています。大体佐賀大学の1学年で900人就職する人が毎年出るんですけれども、250人ぐらいが佐賀に残っていると。なので、佐賀出身で県立大学に来ましたという子は、恐らくいろんな要素があると思うんですけど、そのまま佐賀に就職してくれる可能性が非常に高いのかなと思うと、先ほど部長が言われていた中核人材の育成ということに大きく寄与できるのかなと、とてもわくわくしています。

私からは以上です。

#### ○落合教育長

佐賀大学は4分の1しか入れないわけですね。志願者はもっといるんでしょうけどね。

#### ○進政策部長

もっともっていますね。

#### ○山口知事

僕が聞いているのは、佐賀大学に入りきらんけんが、ほかの私立とか、ほかの国立大学に行っているという声は結構聞く。

#### ○落合教育長

多分、福岡辺りに行かないとだめだと思いますね。

#### ○加藤委員

うちも県立大学は進学者がいるんですけど、やっぱり長崎とか、隣県にないから行くんですよね。あとセンター試験も受けるんですけど、そこで県立大学があれば、なお、国立に届かない子たちでもいいんじゃないかなと。うちも選択肢の幅が広がって、ありがたいなと思います。

### ○山口知事

だから、実践的な大学をつくれれば、それが本当にかえって入ってよかったなと思ってもらえるようにしたい。

### ○加藤委員

今、宮城県で「推活×就職」という、自分もできること、好きなこと、能力がある分野を生かしたいというところで、それが就職に結びつくという活動を私見たときに、自分の好きなことで就職できるっていいなと思って、そこを伸ばしていくと、何か楽しくなるなど。大学って研究機関っていう、私はそういうイメージなんですよね。研究は大事なんですけど、そういうふうに自分の好きなことで就職ができるというところにつながれば、県内も企業も活性化するし、県も元気になれる、「さがすたいる」ですよね。

### ○牟田委員

具体的に答えなくていいんですけど、場所は大事だと思うんですよ。通学するのも、わざわざ交通の便が不便で、アパートを借りなきゃいけないなんていうところでも、通う子供たちはそれでいいのかというのはいくらも考えなきゃいけない要素なんじゃないかと思っています。

そしてもう一個、やっぱり通うのは18歳以上の人たちであって、もう既に年取った我々の目でここにしたい方がいいんじゃないかというふうにも、若い人だったら佐賀のどこにあれば行きたいのかなとか、ぜひそういう発想を持ってほしいなど、これは僕個人の意見ですけどね。

だから、交通の便とか、子供たちが行きたいのかな、そこに。もちろん教育内容、学校もポリシーを持って行くんでしょうけど、やっぱり通う、暮らしがあるわけだから、通うのに便利だとか、そこで暮らしたら楽しいのかなとか。それを10代の子供たちの目でも考えた方がいいんじゃないかとは個人的には思っています。

ゆっくり考えてもらって結構でございますので。

### ○落合教育長

県立高校の進学先を詳しく見てみると、東部の久留米の方面に進学するのが多くの子供たち。なかなか西南部、武雄とか鹿島から久留米には行っていない。長崎方面に行くのはやっぱりそっちの西南部、逆に言うと東部のほうからは長崎のほうにはあまり行っていない。やっぱり地理的な問題というのは結構聞いていて、そういう意味では、県内に大学がないというより、ある、そこにいたいという層は必ず出てくるだろうなど。そういう意味で、先ほど牟田委員からあった地理的な問題というのは重要だろうと思います。

○山口知事

だからさ、やっぱり佐賀県の教育委員会はすごく頑張っているじゃないですか。いい子供たちをさっきの話でつくったとする、あんまりロストしすぎるって、何かもったいないというかね。この中で輝かせてあげられる子供をつくってあげたいなど。

○牟田委員

だから、この5年か10年で、がっと変わっていくように。

○落合教育長

県立大学もですけど、佐賀大学も、また西九州大学の新しくできる私立大学も、かなり全体が魅力アップしないと……。

○山口知事

そうそうそう。だから、大学って連携しているからさ。俺も長崎にいたとき、大学の担当だったけど、大学同士連携しているからさ。そこってすごく活性化するわけよ。お互いのインターカレッジだって、人を授業をお互い送り合ったりとか、佐賀県もほとんどそれができていないので、2つの違う大学がそれぞれちょっと、西九州大学はある意味、特徴を持った大学なので、なかなか。

○進政策部長

県立大学がないこともあって、自分ごとになっていなかった気がするんだよね、大学という点で、県としてですよ。

○山口知事

自分で持っていないからそうなる。

うちのヘリコプターだって、やっと導入したら、やっと空からのいろんな救助活動がやっと分かるようになる。自分が持っていないもんだから、ほかの県が何をやっているか分かっているものが何もなかった。

○落合教育長

県行政と見たときに、国立とか私立も含めてだけど、それをどうするかというのはあまり考えてきていなかった。

○進政策部長

結局、大学連携みたいなのもあまりうまくいっていない。今回、こういうことを検討するに当たって、ほかの大学からも逆に来たいというのもあって、これで一緒になってやっていけたらまたいいですよねと言っていて言われていますから。

○落合教育長

そういう意味では、そういう効果はあると思っていますね。

○牟田委員

行政を長くやってきて分かったんですね。なかったからね。

○山口知事

俺はだから、本当は平成の間につくってほしかったんだと思うけど、しょうがないから、逆にピンチアンドチャンスで、今つくるならむしろいい、間に合う。

○加藤委員

今だからいいと思います、私は。こういう人口が減っているときにつくると、やっぱりほかの大学も一緒に頑張ろうと思うし、減っていくマイナスイメージをプラスに変えられる変化というのが起こってくるんじゃないかなど。今です。

○山口知事

時は今ですか。

○加藤委員

と思います。

○落合教育長

今までそれほど県外流出に意識していなかったんですよ、全然。やっとようやく最近就職にしても……。

○山口知事

昔は就職率が低かったから、佐賀県の子供たちを幸せにするためには、県外に就職させる、大学行って就職させるというくせが過ぎているから。有効求人倍率、昭和の時代って0.4とか0.5だから、半分以下しか就職できなかったやつが、今は1.4だから。

○牟田委員

若い人が就職したがりそうなCygamesとかは佐賀にもあるでしょう。あそこに佐賀から何人ぐらい採用しているのかすぐ分かるのかな。

○山口知事

Cygamesは福岡が多いんだよね。

○進政策部長

少ないのは少ない。でも、Cygamesは佐賀から採用したいと言っているんですよ。なかなか人がいない。結局、大学生があまりいない。

○牟田委員

大学生がいない、また戻っちゃうね。

○山口知事

戻っちゃう。

○牟田委員

ああ、そうかそうか。

○進政策部長

もっとどんどん拡充したいと。

○山口知事

これって全部、いろんなことが連鎖しながら世の中って動いているんだけど、一つのところが完全に抜け落ちている感じがするの。だから、人材供給量がないから。ここさえばかっとはまれば、全てがうまく回り出して、大学だって、別に県立大学じゃなくたって、ほかの大学も入ってくる可能性が十分あるし、要は連鎖がいい感じに流れていくと思うんですね。

○落合教育長

さっき進部長から説明あったけど、ここまで手薄だったかと、痛感するからですね。

○進政策部長

客観的に見るとですね、データを見ると。

○落合教育長

それから、隣に福岡があって、そこがそれなりに充実したから、あまり不便を感じなかったのかもしれないけど。

○山口知事

よかやっかいという方がおられるからね。ほかにあるからって。でも、佐賀県として見たときに、あまりにもロストが大きいと思うんですね。

○加藤委員

ちょっと全然これに関係ないかもですけど、県立大学は転入学とかという仕組みとかもつくられるんですか。

○進政策部長

そこはまたこれからですけど、そういうのは柔軟に対応できるようにしていきたいと思っています。

○山口知事

あんまり踏み込んで言うと、いろいろ……、そんなこと決めたのかいって言われるけど、全然決めていないから、意見を全部出してもらって素直に。だから、それこそ佐賀県立大学は佐賀県民に安くする制度を入れるかどうかとか、長崎県立大学って長崎県民だけ安いんですよ、入学金とか。だから、そういうことをやるかどうかとか、みんなで議論していけばいいんじゃないかな。

○加藤委員

分かりました。

○飯盛（清）委員

そして、関連というか、就職の話も出てきましたけれども、どういう職業に就くにしても、やっぱり最後は人柄かなと。佐賀県立大を卒業した人は何か違うねというような生徒、学生を育てたいなという気持ちがあります。

学部が幾つかできるみたいですけども、佐賀県立大学に入れば、例えば、ちょっと私

も思いついた弘道館2ですか、有名な人を呼んでお話をされていますよね。それに学生全部聞かせるとか、そういったような組み立てで4年間やっていけば、少しいい影響が出て、最初に言ったようなことにつながるんじゃないかなということを考えてみました。要望といいますか。

○山口知事

そうですね。だから、教師陣はまさに実践的な、えっという可能性、弘道館もそうだけど。

あとは、半導体関係とか、ああいうところも人が足りなくて、そういったところからぜひ派遣したいという方も多いのでね。

○牟田委員

今日ここで話したようなことを、ちゃんと知事ふだんから発信していましたっけ。今日聞いて、ああ、なるほどなとか思ったんだけど、ふだん説明されているの。

○山口知事

まあ、じわじわと。だから、本当に僕らが決め打ちしてなくて、まさに今日しゃべったこの程度のところで議論を止めているわけよ。だから、だいたい議会からも唐突だと言われたりもしたので、俺的には選挙前にちゃんと示してやっているんだけど、だから、いい感じで皆さんに伝わっていけばいいなと思うんですけどね。

○牟田委員

よく分かりました。必要性はよく分かりました。

○前田政策総括監

飯盛委員よろしいですか。

○飯盛（裕）委員

県立大学ができることはすごくいいんですけど、その後、学んでその後また県外に流出というのは避けたいなというところがあって、設置場所の考え方で企業と一番最初に来ているんですが、ここってすごい大切だなと思っていまして、今、佐賀大学の中で、サガHR交流会って、県内の企業と産業が関わっていると思うんですけど、そこにもメンバーで入っていて、やっぱり大学の3年、4年生って就活どんなですかとか、どういうのがいいですかとよく質問があるんですけど、そういう大学の1、2年の段階で企業の人たちと接



点があるような仕組みができれば、県内就職が増えるんじゃないかなと思うので。

アメリカの大学に行っていたんですけど、大学に在学中にインターンシップをずっとやらないと卒業できないんですよね。結構、日本って卒業前ぐらいに就活して、ここを受けて、ここを受けてとあるんですけど、アメリカって大体友好関係とか、アルバイトしていてそのまま決まるケースって多いんですよ。そういうのを地元の企業と連携して、県立大学に行ったら結構こういうところも就職しているからというのがあれば、集客率というか、強みになるんじゃないかなというのは感じます。

○山口知事

そっかそっか。だから、佐大は佐賀での就職者は6割が県内就職しているわけね。

○荒木委員

そうです。6割ぐらいですね。大体。

○山口知事

その辺は一つの目標にしますね。

○牟田委員

最後にまたいい。

○前田政策総括監

お願いします。

○牟田委員

僕個人としては、県立大学が全国にないのは佐賀だけだとか、大学が少ないからつくるんだというのは正直好きじゃないんです。今日聞いていたら、ちゃんとこういう大学にしたいんだと、それが佐賀のためになるんだと、だからつくりたいんだというのが分かってよかったということで締めてもらえたらと思います。

○山口知事

どうやってうまく県民に伝えたらいいのかな。難しいでしょう。こうやって話すと分かってくれるんだろうけれども、どうしてもそこにはないからだというところがすごくステレオタイプにいくんだけど、決してそういうことじゃないと。ありがとうございました。

○前田政策総括監

そろそろお時間でございますので、牟田委員よろしゅうございますでしょうか。ありがとうございます。

それでは、以上をもちまして会議を終了させていただきます。本日はどうもありがとうございました。